

琉球大学学術リポジトリ

離島出身教師のライフヒストリーに見る教師の専門性
と離島へき地教育の豊かさ：
養護教諭友利良子実践から「島に生き、島で教える
覚悟」を考えることを通じて

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学教育学部 公開日: 2020-10-22 キーワード (Ja): 教師の専門性, 教師の語り, ライフヒストリー, 離島へき地教育 キーワード (En): 作成者: 山口, 剛史, 友利, 良子, Yamaguchi, Takeshi, Tomori, Ryoko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/47069

離島出身教師のライフヒストリーに見る教師の専門性と離島へき地教育の豊かさ

—養護教諭友利良子実践から「島に生き、島で教える覚悟」を考えることを通じて—

山口剛史¹，友利良子²

Teachers' specialty and richness of remote island education from life history of a remote island teacher: Thinking "Preparedness for living and teaching on the island" through a practice of a school nurse, Ryoko Tomori.

Takeshi YAMAGUCHI, Ryoko TOMORI

要約

本研究は、教員のライフヒストリーから教員の学びや成長のプロセスを描き出すことで、教員の成長を自身がどうとらえているのか、教員の専門性（ここでは、子ども理解や授業力）の獲得のきっかけは何なのかを明らかにすることにある。とりわけ沖縄県は多くの離島があり、多くの教員にとって離島勤務は必須であるが、離島勤務を積極的にとらえているとは言い難い状況がある。本稿では、長年、八重山地区で養護教諭として勤務した友利良子氏のライフヒストリーから、離島へき地教育の可能性、そこでの教員の専門性を探ることで、これらの状況に応えたい。友利良子氏の教育実践から、何より「離島にも子どもがいる」という言葉に示される通り、島に生きる子どもの存在を正面から見つめ、逃げないこと、そこに生きる営みや文化に敬意をもってあたることの重要性が示された。そして、自身の経験から語られた「教師として島に生きる」とは、「島に生きる大人」として、子どもから逃げず正面から向き合い、大人になった教え子たちとも島を支える大人として付き合っていく覚悟をもって子どもたちと接していくことであった。大人（市民）として全人格的に関わることで、「忘れられない教員」「つながりつづけたい大人」になっていく、これが離島へき地教育の豊かさを示していることが明らかになった。

キーワード：教師の専門性、教師の語り、ライフヒストリー、離島へき地教育

はじめに

へき地教育は、「教育の原点はへき地にあり」と言われ、少人数指導や自然豊かな環境が一人一人を大事にする教育が実践できると、その価値が語られてきた。しかし、へき地での生活の困難や小規模・複式学級指導の困難さから、へき地校勤務はかならずしも積極的にとらえられてこなかった。それに対し、玉井康之（2006、2019）などによりパラダイム転換の必要性が語られるなど、へき地教育の捉えなおしが提唱されてきた。沖縄県内の教員にとってへき地勤務は義務であるが、「教育の原点」として積極的に理解されているとはいいがたい。交通の利便性が向上したとはいえ、沖縄の離島に生きることへの困難、また複式指導など離島へき地校での学習指導の難しさなどもあり、離島へき地勤

¹ 琉球大学教育学部 Faculty of Education, Univ. of the Ryukyus

² 元公立学校教諭 Retirement public school teacher

務は教師にとって厳しい勤務地と理解されているⁱ。このような中、教員志望の学生に対しどのように離島へき地教育を語ることができるのか、離島の厳しさを理解し受け止めつつも、教育の原点をどのように現代的に見出すことができるのか大きな課題であった。このような問題関心から、教育学部において 2005 年より「離島へき地教育概論」を開講し、沖縄の離島へき地教育、とりわけ離島に住む子どもたちの姿、学校教育実践、山村留学や学校統廃合について紹介し、「離島に住む子どもたちの学びと育ちとは何か」を学生と考え合ってきた。

その中で、具体的な離島へき地教育の実践を紹介していく機会があった。「教育の原点はへき地にあり」という言葉を具体的に示す教育実践は、これまでさまざまな形で語られてきた。その中でも有名なものとして、平野婦美子「女教師の記録」ⁱⁱがある。昭和 15 年に刊行されたこの記録は、へき地に赴任となった平野が子どもたちの生活状況に驚きながらも子どもたちの生活をつくっていく営みが描かれている。沖縄では、八重山地区での教育実践のまとめとして宮里テツ氏の「テツちゃん先生はろくおんてえぶ 沖縄・離島の女教師の記録」ⁱⁱⁱがある。与那国島、石垣島、西表島での国語教育実践を中心とした宮里実践も、沖縄の離島教育の教育実践史を語るうえで貴重な記録である。しかし、離島出身者がどのように地域に向き合ってきたのか、そこからどのように教員となっていったのか、離島出身者と沖縄本島から来た教員とのギャップはどこで生まれたのかなど、より具体的な疑問に答える必要性があった。

2009 年より石垣市立八島小学校との共同研究がはじまり、友利良子氏との出会いがあった。彼女は後述するように、八重山で生まれ育ち、八重山地区で養護教諭として、島の教育に関わってきた。その中で、地域に学び、子どもに学び、自身の教育活動（教育実践）を創り上げてきた。友利良子氏の教育実践は、沖縄の離島へき地教育そのものでもあり、彼女の教師としての成長は、教師がどのような専門性を獲得すべきか、多くの示唆を与えてくれた。そのため、何度も聞き取りを重ね、2014 年度より 2018 年度までの 5 年間、講義「離島へき地教育概論」に講師招聘し、「友利良子実践に学ぶ離島へき地教育」として学生と「教師として島に生きるとは」を学び合ってきた。

本ライフヒストリーは、2017、2018 年度の講義内容を再構成し、山口が 2015、2020 年におこなった半構造化インタビュー調査の内容を付け加えたものである。インタビュー内容を逐語化し、本人に文章を確認してもらったうえでまとめている。

2. 友利良子氏のライフヒストリー

(1) 生まれ育ちと教員になるまで

友利良子（旧姓田盛）は、1958（昭和 33）年、石垣島の宮良集落に生まれた。子どものころから、親が「勉強しないと」「ちゃんといろいろなことができるようにならないと」と言われながら育ったという。宮良集落は、当時国費の留学生（本土への留学）が出るなど優秀であったため、「ちゃんと学ぶこと、勉強しないといけないよっていうことを教えてもらった」と振り返っている。そのような中、小学校での教師との出会いで教師への強いあこがれを持つようになったという。当時を、次のように語っている。

「それは何かって言うと、憧れ。素敵なんです。お家では、ご飯食べて寝てなんだけど、学校に行くと先生たちがとっても素敵、まぶしいくらい。それは何かというと、豊かな表現や言葉かけがあって、私を素敵な言葉で褒めてくれるわけですよ。そしたら、あんな大人になりたいって思ったわけです。」（2015 年聞き取り）

「（集落に）間借りしてる先生にはすごく憧れました。もう、いつも素敵なワンピース着てさ。だから、先生たちの何気ないこの動きが、服装も含めてね。すごくこんなに子どもに影響するんだなって考えたときにね、独身の頃はちょっと頑張りました。（笑）」（2020 年聞き取り）

1. 友利良子氏の赴任歴

年	勤務校・実践	経歴等
1979年(20歳) (S54)	1. 与那国島: 久部良中学校	・臨時として採用 ・初の教員宿舎生活
1981年(22歳) (S56)	2. 波照間島: 波照間中学校 ・給食担当 ・文化祭での発表・展示	・新規採用 ・島の生年祝いで踊る
1984年(25歳) (S59)	3. 石垣島: 川原小学校 ・体力づくり(トリムマラソン) ・大本小との兼務発令 ・算数の研究指定校	・結婚 ・教師として大事な3つの言葉
1989年(30歳) (H1)	4. 石垣島: 明石小学校 ・給食担当(食育)	・通信教育で教員免許状1種
1991年(32歳) (H3)	5. 石垣島: 大本小学校 ・体力づくり(トリムマラソン)	・長男誕生
1996年(37歳) (H8)	6. 石垣島: 大浜小学校 ・思春期教室	・次男誕生
2002年(42歳) (H14)	7. 竹富町: 竹富小中学校 ・「命の授業」開始 ・「住民健診」実践	・はじめての併置校勤務 ・地域の保健師との連携 ・実践論文「子どもたちの健やかな心と体づくり～保健室と地域との連携を通じて」
2005年(45歳) (H17)	8. 石垣市: 明石小学校 ・二度目の勤務	・思春期保健相談士の資格を取得 ・NPO活動「Love Peer Price やいま」スタート
2008年(49歳) (H20)	9. 石垣市: 八島小学校 ・「命の授業」 ・校区内の助産院を訪ねる ・学校医との連携 ・ピア活動(八島ピアっ子) ・TT授業(各教科)	・琉大との共同研究 ・新規採用養護教諭の指導 ・JICA研修員の受入れ ・平成25年度文部科学大臣優秀教職員表彰
2014年(55歳) (H26)	10. 石垣市: 登野城小学校 ・「命の授業」	・第13回九州地区健康教育研究大会での実践発表 「命をみつめ自分も相手も大切に生きる子どもの育成～学校・家庭・地域と連携した『命の授業』を通して」 ・H29年度沖縄県学校保健功労者表彰
2018年 (H30)	定年退職	

(山口) お家に先生が来たりとかあったの？

(友利) うん (否定)、家庭訪問のときだけです。家庭訪問、楽しみでしたね。ただね、地域的にあの頃バス。車じゃないから、先生たちがバスで出勤していました。そしたら、私たちがちょうど学校に行く頃に、先生たちがバスを降りて、大通りから学校に向かって歩いてくるときに出会うと、先生たちが、おはようございます！って声掛けてくれて、その時の笑顔と声色が、とても素敵に感じて、一日頑張ろうと思ったし、とても嬉しかったですね。

(山口) ああ、なるほどね。

(友利) だから何だろう、多分、かわいい小学生だったはずよ。(笑) ときめきがすごい、すごかったっていうのかな。良い先生たちにあの頃、出会ったんだろうね。

(2020年聞き取り)

島の子どもにとって、集落外、島外からくる教師は、知らない世界を見せてくれる存在であった。島という閉ざされた社会であればなおさら、子ども心に教師という存在が、集落の大人とは違う輝く存在として記憶されるのは当然のことかもしれない。学校生活を通じ、教師の思い出について、次のように語ってくれた。

「1年のときの先生の温かさっていうのが残っています。この先生が優しくみんなに語るっていうよりも、先生の持つてる雰囲気、温かさが心に残っています。2年生のときの先生も、いつも明るく歌を歌わせてくれたっていうのがあって、たくさんは残っていないけど、その年、その学年の良いところが記憶にあります。忘れもしない、4年生のときはね、実は研究校だったと思うんですよ。今思えば国語の研究校で、研究授業があるんですね。見通しの学習っていうのがあって、今日の授業の見通しを立てる授業です。あれだけ強烈に残ってるんですよ。なぜかっていったら、先生たちの真剣さが伝わってきたから。」

(2020年聞き取り)

(山口) 中学校まで、憧れのある先生たちを見て育ったわけじゃないですか。そのときの学校観と、島に戻ってきて教員になったときの学校観っていうのは、変わらないんだ？

(友利) 変わらない。私は変わらないです。うん。変わらない。だからそこが土台なんだろうなって。自分が憧れた、大事にされたという部分がやっぱりあるから、子どもたちを大事にしなくちゃ、大事にしたい、っていう思いっていうのかな。そこにつながってるような気がする。私は、それは変わらない。

(2020年聞き取り)

このように、教師へのあこがれにあわせて、教師のかかわり方の記憶が、学校や教師に対する肯定的な認識だけでなく、「子どもたちを大事にしなくちゃ、大事にしたい」と、子どもを大事にする学校観、教師観につながっていた。

そのうえで、養護教諭を目指すきっかけとなったのも、やはり養護教諭の存在にあった。

「なぜ養護教諭かっていうと、小学校の時は養護教諭なんていませんよ。中学校の時、初めて九州の方が養護教諭として保健室に配置されて、『保健室って何するところ？』『養護教諭って何？』という感じだったんですね。自分もお世話になったこともないし。高校の時の養護教諭が、素敵な先生でした。初めて保健室っていう場所がこんな場所なんだっていうことを知ったんだけど。とってもやさしい語りとかやさしい笑顔が私をつつみこんでくれました。その印象が強かったです。特に関わりとか、悩みを聞いてもらうこととかではなかったんですが、かけてもらった言葉や語りが素敵だった。だからやっぱり憧れなんですよ。」

(2015年聞き取り)

このような原体験から、養護教諭を目指して、県外の短大に進学することになった。短大卒業後は、すぐに八重山地区に、養護教諭として戻ってきた。彼女が20歳の時だった。なぜ、島にもどってきたのか。

あの頃は大学に行かせてもらうだけでも大変だったんです。だから、行かせてもらった以上戻ってくるのは当然という部分がありました。また教育実習などの経験もありました。大学での教育実習はすべて島でやりました。宮良小、大浜中と2回行きました。どっちも楽しかったです。教育実習の研究授業は中1の病気の予防の授業だったことも覚えています。八重山病院で看護実習もしました。これらの実習では、うちの学校出身者ということで紹介され歓迎されました。大学の同期で本土にそのまま残った人もいたけど、その方が不思議だったくらいです。

(2020年聞き取り)

このように、教員になるにあたって、県外という選択肢はなかった。また、そこに葛藤も存在していなかった。肯定的に島で教師をするということをとらえ故郷に戻ってきている。

彼女の教員人生を語る前に、離島認識について紹介しておきたい。石垣島は八重山地区の行政、流通などにおける中心となっている島である。石垣島が離島としてさまざまな離島苦を抱えているが、竹富町、与那国町などの離島には高校がない。そのため、離島の子どもたちは「15の春」で高校進学のため島を離れることになる。高校生活の中での離島出身者の様子を語ってくれたことがある。

「だからね、私たちも離島で生まれ育ってるんだけれども、さらに離島って大変だったんだろうなって思ったのが高校のとき。今まで離島をほんとに意識したことがなかったけど、高校に行くと、やっぱり西表島とか与那国島出身者がいるじゃないですか。その人たちは寮にいる人もいたけど、ほとんどの人たちが、間借りしたり、下宿したりしていました。アパートに一人住まいしている友達がいって、一度ね、「良子、自分のアパート行く？」って言われて行ったことがあるんです。その部屋の家具や食べ物を見て、一人で慣れない暮らしの中で、親に迷惑をかけないように一生懸命生きてる姿がみえました。彼女は、結局なんかあまり周りにもなじめず、つらそうな日が多かったのを、いまだに覚える。」

(2020年聞き取り)

離島とはいえ、石垣島の宮良に育った自分が、いかに恵まれた生活をしてきたのか、それは与那国島、波照間島、竹富島の勤務で、改めて振り返ることになったと語ってくれた。ここに八重山地区で生きていく厳しさを見ることができる。

ここからは、本人の勤務歴に沿って、各学校での子どもたちとの出会い、そして先輩教師からもらった言葉、教育実践を紹介していきたい。そこから彼女の教師としての成長を描いてみたい。

(2) 臨時教員として赴任した与那国島久部良中学校

私が与那国の久部良中学校に赴任したとき、20歳でした。中学校の3年生は15歳、わずか5歳しか年の差がなかったんですよ。ものすごくとまどいました。年が近い、どうしよう、私に何ができるんだろうという思いもかなりありました。でも受験を控え、15の春をむかえようとしている子どもたちは、みんな必死でした。私はそこではじめて教員宿舎での生活をしました。私に、中3の子どもたちが、「先生、彼氏いる？」とか、え？こんなこと聞かれる？と思って、思春期の島の子にびっくりしたことがあるんです。それから、「先生、どここの大学出てきたの？」とかね。もう、いろんな質問を受けるんですよ。自分も小さいときそうだったように、やっぱり島に来る教師に対しての憧れであったり、すごい興味だったり、たくさん持つんですよ。いろんなことを聞きたい。教えて！

外の世界を知りたいっていうのかな。いろんな質問を受けました。

夜中に急に職員が腹痛を訴えて呼ばれたこともありました。この方はヘリで運ばれました。そしてその後、入院をしました。ですから、島って大変だなんて、本当に思った最初の年ですね。

(3) 新規採用され波照間中学校へ—管理職から伝えられた2つの言葉—

2年間補充をして、その後、私は22歳で波照間中学校で採用になりました。新規採用として3年間過ごしました。波照間島是最南端の島、与那国島是最西端の島です。その両方で勤務しています。ほんとに与那国島で仕事するのに、また波照間島かとも思った、いや、思いませんでした。(笑)頑張りました。採用になることの喜びが大きかったです。今思えばね。

5時までは先生、5時あとは生徒と一線をひくことも大事だよ

波照間中学校での勤務は、大変でした、いや楽しかった。いろいろです。若いっていいですよ、これは特権ですね。子どもたちは、若い先生にすぐくっついていきます。私が赴任したときも、子どもたちが中学生ですから、私のところに寄ってくるんですね、「先生、高校はどこだった？」って。高校もない島ですから。「高校はどうだった？どんなだった？」「大学行ってきたんだよね、大学ってどんなところ？」と、おしゃべりをしに、5時後なので保健室じゃなく宿舎までもぞろぞろとみんながやってくるんです。最初は楽しかったですよ。でも毎日毎日来たらどうでしょうね。ある日、教頭先生がこんなことをおっしゃいました。

「良子さん、ちょっと、楽しいかもしれないけどね、5時までは先生、5時あとは生徒と一線をひくことも大事だよ。」

と教えていただきました。このときに、どういうことかな？って思ったんだけど、今後のあり方っていうのかな。けじめをつけることの大切さを示してくれたんじゃないかなって私は思います。子どもと話していて、子どもといて楽しい、私は好かれてるんだっていう、ほんとにそういう喜びがありましたよ。でも、教師がけじめをつけるということの大切さを考えさせられましたね。

離島にも子どもはいるんだよ

1年が終わろうとしているところにね、ある日、校長先生に呼ばれました。校長先生から、「良子さん、採用になっての1年どう？」と聞かれた後、「この職業を君は選んだんだよね？八重山でこれからずっと仕事をしていくんだよね？」と聞かれました。私の中ではそう決めてたので、「はい」と答えたら、こんなこと言われました。「八重山は離島が多いよ、だからね、離島勤務は宿命だよ」と。私も「よくわかります」と答えました。そして、校長先生は「宿命だと思ってがんばりなさいな」と。その次でした。

「なぜなら離島にも子どもはいるんだよ、離島で懸命に生きてる子どもたちがいる。子どもがいるから私たちはやっていける。」

あそこ全部離島採用だったんですよ。だから離島で勤務していることが特につらいということではなかったんです。校長先生の、離島にも子どもがいることをわすれちゃいけない、この言葉はずごく私の心の中に残りました。ちょっと厳しい言葉だったんですけど、そのときにね、自分の中でなんかピシッとなるっていうか、なんかスイッチが入りましたね。いつ人事異動でまた離島勤務があるかもしれない。でも、私が選んだ道。そのとき、私はすごい緊張したんですが、覚悟を決めた瞬間だったなあと記憶しています。なんか、子どもがいるから、そこに子どもがいるんだと。その言葉ですね。それからは、人事異動で内示が出たときに、勤務地になる子どものことを思いながら、きちんと心の準備をしていくようにしようと思うようになりました。

島の暮らしのきびしさ

でもね、離島勤務はやっぱり厳しいものもあります。何かって言うと、小さい島は、養護教諭が給食担当とかをしたりします。台風や波浪で船が止まる、飛行機が出ないとなると物資も入ってこない。だから、給食の準備もほんとに大変でした。

また、こんなこともありました。波照間勤務のときに、夜中、バイク乗り回して、島の一周道路があるんですけど、そこでバイク転倒、肋骨何本か折れた人がいました。私を呼びに来ました、保健室に、あ、保健室じゃない、夜中、私の宿舎に。ドン、ドン、ドン！って起こされて、どうしたのかな？と思って開けたら、先生！バイクひっくり返してけがしたから来て！って。私、呼ばれたんですよ。あの頃、島に保健師さんもいたんですね。でも、保健師じゃなくて、私を呼びに来たので、私？って言ったら、そう、先生を呼んできて！っていうことで行きました。もう、そしたら大変なことになっていて、ヘリを要請するかどうかってことで、保健師さんの所に運びましたね。

こんなこともありましたよ。波照間島はね、生徒会でヤギを飼っていました。ヤギを飼っているの、朝早くヤギの草当番があったんですよ。生徒が草を刈りに、新品のカマを持って行きました。そしたら草刈りのときに指を切りました。朝早く、その子のお母さんが、先生！と宿舎に駆け込んで来ました。どうしたんですか？って言ったら、うちの子がね、先生呼んできてって！って。不思議に思っただけで聞いたら、必ず先生に来てほしいと。そうことで行き手当しました。もうね、私は、え？と思ったんですけど。でもね、こんなふうに子どもや保護者から頼られているのは良かったのかな？と思いました。

島で地域住民として生きる

それから島では、いろんな行事があります。私が波照間島で印象に残っている行事の一つが陸上大会です。波照間島はすごくスポーツの盛んな島で、島の陸上大会があるんですよ。私まったくスポーツできません。でも若いというだけで、5つの集落があって、そこに職員が全部わりふりされるんですね、だれだれはどこの担当って。そうすると、若いというだけで、先生走れるよね、何かできるよねと言われて、私は走り幅跳びとリレーに出ました。職員で夜のグラウンドにいて、懐中電灯で照らしながら幅跳びの練習をしました。でも表彰台にのりました。3位になりました。5名のうちの3位ですけどね。(笑)リレーもでて。島の人達は出るというだけで、よろこんでくださって、栄養剤をもってきてくれたり、卵をもってきてくれたり、そういう地域の人達と一緒にやることで喜んでもらえるんだなとわかった行事ですね。

それから、ちょうどね、波照間島にいるときに、ここでいう生年祝い、私たち、生まれ年っていうんですけど、私は戌年です。波照間島にいるとき、それを迎えたんです。そしたら、踊りをしないとイケない、余興をしないとイケないからって引張られて。声を掛けられたときには参加しようと決めていました。そうすることでつながりができるし、何かと情報がもらえるし、何かのときには助けってもらえるしっていうのを、私は感じていました。島でのそういうものは大事にしたいなあっていう思いでした。ほんとに狭いコミュニティの中で、皆さん、いろんなつながりを持ちながら一生懸命生きてるっていうのを学ばせてもらっていたので、それは大事にしたいなあって思っていました。ですので、地域の人と一緒に、舞台上で3つも踊りを踊りました。このように地域の行事や文化にふれるのってとても大事だし、島の人や保護者に大切にしてもらえてるっていうつながりができていくんですね。

「15の春」に寄り添う

波照間島でも高校がありませんので、15の春で島を出ていきます。この子たちのために何かできないのかなと思って、文化祭で、小学校入学から中学校卒業までの島での育ち（成長）を、目で見るように絵を書いて、成長が見える展示をしました。それから、15の春を意識して、これからの健康な生活（食事）について考えてもらうため、三食のモデルとなるような食事をつくって、実際に調理しお膳にならべて展示もしました。当時でも思春期で朝ご飯食べないとか、体重気にするという子どもの声があったんです。そのため育ちの喜びと健康な生活を願ったとりくみでした。さきほどのきびしい校長先生からも「よくがんばったね」とほめられました。そう評価されることが、子どもたちのためにがんばることが大切という考えをより深めることにつながりました。昔はそのようにして人を育てていたんだと思います。

（4）先輩に恵まれた川原小学校—大事にしている3つの言葉—

その次、私は波照間島の後に、川原小学校に行きます。川原小学校も島内へき地の学校です。川原小学校ではたくさんのことを学ばせてもらいました。川原は、パイン栽培が有名な集落です。その当時からパイン農家の家庭が多くいました。その中で、低学年の子が、「ばくのお父さんのパインがいちばんおいしいよ。日本一だ」と自慢していました。キラキラと父親の話をするその子を見て、大切に育てられたことを感じ、学校でも大切に育てていかなければならないと話し合ったことを覚えています。そのくらい、子どもを大事にする姿のある集落だったんです。

川原小に行ったときには、先輩たちばかりでした。そこで地域との関わりや親との関わりが上手い先生、子どもを引き付ける先生、そういう先輩教師を見て学びました。そこで島で子どもと向き合っていくことの大切さ、そしていろいろなことを子どもたちに伝えたいという気持ちを強くすることができました。

先輩たちは、授業づくりもすごく丁寧で、突然に私初めてそこで授業させられたんですよ。いろんな角度から子どもを見る目っていうのを教えてもらいました。だから授業する場を、若い教員を育てるための場にしてくれたんだと思います。挑戦させてくれる先生に出会えたんだなって思いました。川原小学校は算数の研究指定校でした。職員が少なかったので、いつも一緒に研究授業など、いつも何かするときには声をかけてもらって、一緒に教具づくりもしました。それから、報告書も全部手書きでした。その清書を担当することになり、報告書ってこんな書き方するんだなって、先生たちってこんな学びをしているんだなってことを気づかされました。

養護教諭としての在り方が問われた兼務問題

川原小学校での勤務は5年間でした。そこで、先輩たちから教師として大事な言葉をもらいました。そのきっかけとなったのが、養護教諭の兼務問題です。1年間、川原小学校と大本小学校の兼務をしたんです。これはとても大変なことでした。1986年、27歳の時のことです。前年に西表地区の大原中学校と古見小学校の養護教諭が兼務となり、翌年には川原小と大本小、富野小と吉原小が兼務となりました。そのころ八重山地区の小規模校では養護教諭が配置されない学校もありました。そんな時代です。

兼務の時は、私にとって行事がすべて二つなんです。あの頃、土曜日に学校がある時だったので、週6日のうち3日ずつ、川原小学校と大本小学校に勤務するんです。そしたら、行事二つは、まあ若い頃だったので体力的には大変ではありませんでしたが、何が辛かったかっていうと、私がいるのに、もう2学期ぐらいになると、私の本務である川原小学校にいるのに、子どもたちが私の周りをうろうろしたんですよ。どうしたの？って声掛けたら、用務員のおばちゃんを探してたんですよ。おばちゃん、どこにいる？って。どうしたの？って声掛けたら、けがをしたと。けがをしたからいつもおばちゃんに手当てをしてもらってるから探してるって。すっごく、涙が出ましたね。養護教諭の私

を前に、私が目の前にいるのに、もうね、私の存在、ここにはないんだって思うくらいすっごくショックでした。そして、大本小学校には、私が勤務日じゃないときに、朝早く呼ばれ、もう、いろんな思いをしましたね。辛くて泣くことが多かったです。

兼務問題は、組合（沖教組：沖縄県教職員組合）でもとりあげられ「兼務反対に関する要請」も組合から教育行政に対して行われました。それだけでなく八重山地区の小・中学校校長会が要請し、私が勤務していた川原小学校、大本小学校のPTAも声を上げてくださいました。当時の八重山毎日新聞の取材¹⁴も受け、養護教諭の現状が取り上げられました。いろいろな場でこの兼務問題を訴えることがあったため、「良子は口を開けば兼務問題」と揶揄されることもあり、本当につらかったです。体重もすごく減って寝られない状況もありました。その時まで27歳ですよ。どうしてこんな若い私が一生涯懸命やらないといけないのか、そんな気持ちもありました。しかし、先輩たちに支えられてこの時期を乗り越えていきました。兼務になった時、頼りになったのは、養護教諭の先輩たちでした。その先輩方が組合の中でもいろいろなところと繋いでくれました。その結果、定期大会での要請などに発展しました。この問題を組合の教研集会（教育研究集会）で報告¹⁵させていただきました。そうすることで全県的にこの問題を訴えました。そのようなとりくみのかいもあり、行政は兼務を継続する意向を持っていたのですが、兼務は1年で解消されました。27歳の私にとって、教師としてのあり方、生き方を定めることになった大きな出来事だったんです。

先輩からの言葉は、そんな大変な時期にもらった言葉でした。

1つ目：子どものためにNOと言える教師になりなさい

先輩から、あなたが今やってることは正常じゃないよね？って。良子さん、あなたの返事一つで、子どものためになるのか、ならないのか決まるよ。そして、子どもたちをみてごらん、あなたがいないときの子どもたちってどうなのって。子どものためにそれっていいことなの？って。絶対ここでNOって言うべきだよ、って教えてもらったんです。まだ私、いろんなこと考えきれないときだったので。あなたがそこでイエスと言ったら、もっと兼務校が増えていく。うちの学校だけじゃなくて、ほかのところにもこれは広がっていくよ。養護教諭は1校に1人じゃなくてもオッケーってなってしまうよって言われました。自分も苦しかったですし、子どもが養護教諭を忘れていくのも辛かったです。なので、子どものためにNOと言える教師になりなさいという言葉ももらいました。その時に私は、やれと言われたからやらないといけないと思っていたんですね。あの大変な時を先輩に支えてもらったんです。

これはね、難儀だから草刈りやらないとか、難儀だからこんな仕事をしませんということではないんですよ。兼務をするということが、子どものためにどういうことなのかを考えてねっていう意味です。子どものために、兼務をすることが本当にいいことなのか、どうなのかと考えたときに、絶対に子どものためではないでしょう。ならそこで、とてもこれは続けられない、大変なことなんですと。子どもにとって大切なことは何なのかをしっかりと考え、NOと言える教師になりなさい。そういうことをこの時に教えてもらいました。

2つ目：大変なときこそチャンスと考えなさい

このように、誰にでも大変なことはあります。兼務問題もそうでしたし、さまざまな研修や研究発表などもありました。算数の研究発表もそうです。いろんな大変なことがあるかもしれないけど、それをチャンスだと思って頑張るか、大変だから嫌だって断るかという話を聞いたことがありました。そのときに、たいへんなときこそチャンスと考えなさい。なぜかっていうと、それが自分の成長につながるから。それを乗り越えたときに、あなたは強くなるよっていう言葉ももらいました。

3つ目：打たれ上手になりなさい

それから、打たれ上手になりなさい。この言葉はですね、ありがたかったです。何もかも全てうまくいくわけじゃないですよ？今、私この40年仕事をしてきて、今でもこの言葉はすごくありがたいです。この仕事をしていく中で、いいことばかりではないですよ、いろんなことがあります。仲間とのつながりだったり、子どもにちょっといろんなこと言われたりとか、保護者からあったりとか、地域でいろいろあったりとか。いろんなこともあります。でも、そんなとき、いつまでもよくよしいたらだめだよ。切り替えて前向きになるということも大事なんだからねということで、そういう意味で、打たれ強くなんなさいと先輩に言われました。私は、この言葉で救われたんです。うまくいかないときこそ、そこで踏ん張るか、そこで、どうせ自分とは下を向くか。これはね、自分なんですよ。それをどうプラスに変えていくか。私にとって、私を成長させた意味のある3つの言葉です。

(5) つながることの大切さを実感した明石小学校

それから勤務したのは、明石小学校です。私は、やっぱり学び続けたいという思いがありました。その当時、免許は二種でした。通信教育で、一種に切り替えるために、時間をみつけて昼休みや放課後に勉強しました。その姿を子どもたちがみていて、先生、何こんなに勉強ばかりしているのって言われたこともありました。一度目は教員免許の1種を取得できた時であり、二度目の明石勤務時には思春期保健相談士の資格を取得した時でした。そのため、明石での勤務というと、すごく充実していた時という記憶なんです。

障害をもった子どもとの出会い

ここでは障害をもった子どもとの出会いがありました。この子は、私が明石小学校で勤務していたときの1年生でした。その時は、かすかに光が見えていました。2年生からは、本島の盲学校に転校していきました。

学校とこの子の家が近かったので、帰るときは安全面にも配慮して、手をつないで私と毎日下校していました。学校では、教室の隣が保健室だったので、休み時間になるとやってきて、良子先生ってくっついてくるかわいい子でした。すごい人懐っこい子でした。この子とは、一年間だけのつきあいだったんです。たった1年間の付き合いだったんですが、未だにずっとつながりがあって、現在、もう三十何歳かなあ？それで、福岡で仕事をしています。この子は、おじいちゃんとおばあちゃんが三線(サンシン)をずっとやっていたので、自分も三線をして、教師の資格も取って頑張っています。

明石は、開拓集落という沖縄本島からの移民でつくられた集落です。そのため、お盆のときに明石エイサーとって、すごい地域の大きな行事があります。この子たちは、小さいときからそういう地域の行事に触れてきているので、エイサーのときになると、三線を弾くために帰ってきます。毎年、帰ってきて、福岡からですよ、この地謡(じかた)をつとめているんです。帰ってくると連絡をくれるんですよ。「先生、帰ってきたよ、見に来てね」って。その彼がこんなことを言っていたんですよ。

「自分は、目が見えなくてね、大変な時があったんだけど、地域に自分はとってもかわいがられた、だから恩返しをしたいんだよ。先生。自分が帰ることで、おじいちゃんもよろこぶ、もちろん親もね、親孝行もしたいという思いで、自分はこの時期になると、毎年帰っているんだよ。」

思春期の子どもたちとの出会い

そのときに、実は、思春期の子どもたちとの出会いが、また私を大きく変えました。6年生というと、もう1年間だけの付き合いですが、担任の先生と関係があまりうまくいっていませんでした。子どもも苦しみ、もちろん保護者も苦しんでいました。保健室に子どもたちがきて、もういろんなことを話していくんですね。でも学級ではおりこうさんですよと、担任は言っていたんです。ですから、保

健室でみせる子どもの顔、学級での顔、親・保護者に見せる顔、地域で見せる顔、いろんな顔を持っているんだあと子どもに教えてもらいました。その時に、校長先生から、子どもたちを保健室のほうで、子どもたちの話を聞いて、声をかけてあげてほしいと言われたので、1年間かかわったんですよ。この子たちに、いつでもあなたをみてるよ、というメッセージを、直接そういう言葉ではなかったんですけど、伝えてきました。素直でかわいい子どもたちでした。

私は、ほかの先生方にもこの子たちの思いを伝え、それから担任にも、私が子どもたちに対してこんな声掛けをしたよ、保護者はこんな思いをしているよということを伝えながら、もちろん管理職にも報告し、みんなでこの子たちを見守っていました。この子たちにはたぶんいろいろな思いがあったんでしょね。

卒業から何年も経ち大人になった子から、母の日に、私へのお礼、感謝のメッセージとともにプレゼントをもらいました。

「良子先生、いつもありがとう。あらためて考えると、先生の存在って不思議。友達みたいになんでも話せるし、お母さんみたいにあたたかいし、先生みたいにいろいろ教えてくれるし、先生だったね(笑)、でも先生との出会いは、一番だった。これからも仲良くしてください、よろしくです。」その時の子どもたちは、今ではもう30代半ばになっています。今でも、その子たちと一緒にお酒を飲みながら語り合ったりしています。なんか、つながりってすごいなあって思うんですね。その彼女が私に言うんですよ。

「あのとき先生がいなかったら、いまの私達はいない、保健室があったから私達はそこに行けた。学校におれた。地域からもいろいろ注意されたりもした。でも保健室があったから。」子どもとのつながりを紹介したくて、彼女に言ったら怒られると思うけどお話をしました。

(6) 大本小学校—長男の誕生から生まれた命の授業—

次に勤務したのが、大本小学校です。大本小学校は、川原小学校に勤務したときの兼務校です。兼務の時に、十分にかかわりきれなかったという思いがあって、異動希望に大本小学校を書きました。

大本小学校では、実は長男を出産したんです。私は、なかなか子どもができなくて、やっとできた、35歳でやっとできた子が、いろいろ大変でした。実は妊娠6カ月で危険な状態になり入院しました。早産の危機とたたかひながら、8カ月(28週)での出産となりました。皆さん、どれぐらいで生まれました？だいたい3000g前後でしょ？皆さんの誕生のときの体重って。理科の授業でもこれしますけどね。うちの子は28週で生まれたとき、実は800gで生まれたんですよ。800gで生まれて、命の危険が何度もありました。初めて、親の思いや、命の奇跡を感じました。元気に育った我が子を見ながら、ほんとにいろんな思いがよみがえるんです。

そういうことを、子どもたちに伝えたいと思って、私の命の授業が実はスタートしたんですよ。これはずっと今でも続けています。その息子が今はもう25歳になっています。次男は20歳です。(2018年度講義時)でもね、女性の皆さん、出産・子育てをしながら仕事を続けるってすごい大変なこともあります。私の場合は、職場の先輩や仲間、そして家族や回りが支えてくれました。そういうことを乗り越えて見えてくることもいっぱいあるので、自分の置かれた環境・状況の中で、懸命に頑張れば、結果が付いてくるなあって、私はいつも思っています。

(7) 保健室に寄せられる声を大事にした大浜小学校

大浜小学校では、不登校の子がいました。担任の先生とうまくいけなくて、この子はまったく学校に来なくなりました。担任も苦しんでいたし、本人もそうですけど、お母さんもすごく苦しんでいました。いつも保健室にきて話をしていたのはお母さんです。その時にお母さんが、こんなことをおっしゃっていたんです。直接担任と話をすると、つい感情的になってしまいそうなんです。だから良子先生、話をきいてくださいと。話をいっぱい聞きました。そして話もしました。私はそれをもちろん

担任に、いい関係が築けるようにという思いをこめて、保護者の思いをいっぱい伝えました。むずかしかったですけどね。

保健室には毎日子どもがやってきます。子どもたちが、「ねー先生聞いて聞いて、担任の先生さあ…」と不満を漏らします。子どもたちが、保健室で漏らす担任への不満で一番多かったのが、「担任の先生さ、話聞いてくれないわけ」というものです。子どもたちって先生方と話したいんだよね。

ですから、学生のみなさん、現場に行くとは担任をなさるんですよね。子どもが何かを言ってきたときに、「先生聞いて」、いつもいつも聞いてあげられないと思います。忙しくて、あるいは研修、出張にいかようしているかもしれない。でもね、そのときに、「わかった、あとで時間つくるからね」とか、「ああ忙しい」ではなく、「何かあったんだね、後で聞こうね。」とせめて声をかけられたら、かけるゆとりがあったらいいなあと、私は思っています。「また、後でね。」というセリフであっても丁寧に声掛けするだけで子どもは笑顔になって、「うんわかった」って、もしかしたら、すっかりして後で聞きなおしても忘れていくかもしれません。中には「後でね」というだけで満足する子もなかにはいました。学生のみなさんには、子どもに丁寧に対応することが大切であることを感じてほしいです。

(8) 竹富小中学校で地域に根差すことの重要性を考える—一心に残る成人式—

私は、竹富町の竹富小中学校に赴任となりました。竹富島は、たくさん観光客が訪れる島です。私にとって初めての小中併置校です。そこでもいろんなことを子ども・地域に教えられました。そこで、濃い3年間を過ごさせてもらったんです。

厳しかった島の人の言葉

竹富島ではですね、島の人に、いっぱいいろんな言葉を、いい言葉も厳しい言葉もけっこう言われました。島はね、学校教育に対してとっても厳しい目をもっていました。なぜかというと、島の子を大切に思ってるからです。島の人から、「島の子が将来、島を担っていく。だから私たちは子どもたちを大切に育ててます」ってはっきり言われました。「だから先生たちも、しっかり頑張ってください」と。

私達が赴任したときに、新しい宿舎ができたんですよ、すてきな赤瓦のね。町並み保存地区なので赤瓦の宿舎でした。しかし、宿舎に入る職員がいない。沖縄本島からの先生もたくさんいらっしたんですが、竹富島はですね、石垣島から通勤が可能な島なんです。ですからほとんどのみなさんが、石垣島にアパートを借りて島に通ってました。私も小さい子がいたので、次男がまだ三歳だったので、実は通いだったんですね。そうすると、島の歓迎会が夜、まちなみ館という公民館でありました。そこで、公民館長さんに私たちみんな怒られました。「お願いして宿舎もつくったのに、宿舎に入る先生がいないとはどういうことだ、宿舎に入らない先生はいらぬ」って言われたんです。怖かったんですよ。ほんとに怖かった。どうしようと思いました。

それからね、こんな方もいましたよ。石垣島での仕事を終えて、島に帰っていらっしたときでした。私達が港で帰る船を待っている時に、この方がその船から降りてくるんですよ。そして、「先生方お帰りですか、さあ給料の分ちゃんと働きましたか」っていうんですね。うわーと思いましたね。ほんとに。私はどういうことかなって思いました。最初のころはすごく怖いと思いましたよ。

でも私にとったら、その言葉ってすごく大事でした。もちろんその言葉に反発して、この島は何？と怒る先生も中にはいました。でもですね、この方たちをみていると、やっぱり島の子どもたちのためにという思いがあるんです。島の子どもたちが、島にとって宝物だっていつもおっしゃっている方だったんです。実際に、島の子どもたちのためにと、一生懸命に学校の行事にも協力なさっている方だったんですよ。だから、私は、子どもたちへの愛情だったんだなあって感じるようになりました。私たちも本気で真剣にがんばろうという気持ちになりました。

中学校になったら私変われる—成人式に呼んでくれた子どもたち—

竹富小中学校に赴任し、引越しをして間もないまだ春休みの時のことです。ある子が、「先生よろしくねー」って保健室にきたんですよ。私は、あなた誰?って思ったんですが、「今度中学一年生になります」って来たんですね。そして、私は何も聞いていないんですけど、自分から「私ね、実はね…」って、私に自分のことをいっぱい語ってきたんですね。その時この子が言ったのは、「私ね、実はね、小学校のときはね、いい子って思われてなかった、でもね、中学校になったら私変われる」って言ったんです。私は、何があったんだろうと考えたら、今年は先生たちがいっぱい変わる、小学校の先生も変わる、中学校の先生もいっぱい変わる、職員の異動が多かったんですよ。そんな中でこの子は、新しい自分を見つけたって思ったみたいです。ですから私ね、この子は結局レッテルをはられていた、そういうことだったのかなって思ったんです。でもこの子なりに、「どうせ私は…」と思いながら、もがいていたんだあって。だから、中学校になったらこんなことしたい、私は中学校になったら変わるんだ、だから私をみてねという決意を、私のところにきていっぱい話をしたんだと思いました。

私達教師は本当に、その子を決めつけずに大事に見てあげたい、見てあげないといけないなあということ強く感じました。小学校の6年間ですごく長いですからね。教師にとって、子どもの情報はもちろん大事ですよ、こういうことがありましたよって。引継ぎの段階でそういう子どもの問題行動など、ネガティブな情報もあると思うんです。けれども、私は、子どもたちのいいところをいっぱいみつけて、声をかけてあげられる先生になってほしいなあと思っています。

実は、この子どもたちが、中学1, 2, 3年間一緒だったんですね。この子たちの成人式に呼ばれました。私は担任でもありませんでした。ただ、この子たちと竹富島で3年間過ごしたんですね。竹富島の成人式は、毎年1月2日の夜のお祝いです。行ってびっくりしたんですが、竹富島の成人式には、先生を1人しか招待しないそうなんです。1人だけです。その1人に私が選ばれたことにすごい涙が出るほど嬉しくて、どうして?って聞いたら、あの子たちが、「私たち、転入生とかいたので、この全員を知ってる、自分たちのことをよく知っているのは良子先生だから。」って言われて、私の息子と一緒に祝いに参加しました。この子たちの一人は結婚して、その子の披露宴にも招待されました。すごい嬉しかったですね。担任でもないのにいろんなところで、節目、節目で私に報告してくれたり、呼んでくれたりっていうのがすごく幸せです。本当に幸せな時間でした。

子どもに寄り添う声かけに悩む

ここでは、子どもへの寄り添い方に悩むこともありました。私は、まず、子どもの声に耳を傾けることが大事で、それに応えるような言葉かけをしてきました。具体的には、「わかった、一緒に考えよう」と言ったこともあるし、一緒に泣いたこともあります。

調子が悪くてもなかなか病院にいけないという子どもがいて、よく保健室にきていたんですね、怒られるかもしれませんが、お母さんに電話をかけたこともありました。その時、もう思わず、「先生の子どもになりなさい!うちにおいで!」と言いました。親を傷つけるとかそういうのではなく、そういうことが言える関係性が、私と子どもとの間であったんです。その時、その子は「もう、先生よ〜」といって、パーンと私を軽く叩きました。そして笑顔になって帰っていきました。

だからその子その子にける言葉ってあるのかなって、その言葉がやっぱりみなさんそれぞれ声のかけ方があるんだと思います。それを見つけてください。

本格的に命の授業がはじめる

竹富小中の授業で大事にしたのは命の授業です。私は、私にできることと思って、担任の先生方と

一緒に考えながらはじめました。5 年生の理科です。理科の授業で命の授業をスタートさせました^{vi}。こういう授業を、中学校の理科の教科担任、竹富島は小中併置校なので、中学校の先生が高学年理科を応援、担当してました。この先生は、独身で自信がないんです、だから授業に入ってもらえませんか？と言われ、一緒に授業づくりをしました。あれから毎年、私は 5 年生理科の単元「人の誕生」の授業では、担任、理科担当の先生と一緒に授業づくりをしています。

「島で生きる」を考えた住民健診の授業

もう一つ、授業としてとりくんだことが、住民健診にふれる授業です。竹富島の子どもたちは、15 歳で島を出ます。この子たちのために、やっぱり将来につながるようなとりくみも大事なかなと思ってとりくみました。例えば私なら、自分で自分の健康を、ちゃんと見つめられる人になってほしいという思い。これは、長寿の島と言われた竹富島の人に気付かされました。だから、私たちが伝えるべきことを、きちんと伝えていかないといけないという思いですね。子どもたちは、学校で健康診断を受けています、この子たちが将来島を出たときにどうなるんだろう？と思ったんです。それで、大人になったらこういう場所があるってということも伝えたくておこないました。5、6 年生の複式学級だったんですが、担任と一緒に行きました。

まちなみ館って公民館があるんですけどね。そこに行ったときに、子どもたちは驚いていました。こんな場所があるの？って。そこにはお医者さんがいて、それから栄養士さんがいて、島の人たちがいるわけですよ。そこでいろんな話を聞かせてもらったりしたんですね。栄養士さんからフードモデルを使っての説明を受けたり、血圧を測ってみたいしました。これが絶対この子たちの将来につながっていくって思いです。そしたら、お医者さんからも素敵な言葉をもらったんですよ。

「君たちは学校にいるときは、学校で健康診断受けるだろう？大人になって、島を離れる、あるいは島に戻ってきてもいい、大人になってから、きちんと自分で、こういう場所で健康診断を受けて、自分で健康に過ごすんだよ。」

与那国島や波照間島の子どもたちからは聞かれなかった声として、島にはたくさんの元気なお年寄りがいる、このお年寄りは自分たちの自慢であり、こんな風に自分たちもなりたいと、子どもたちは語っていました。そのため、島のお年寄りと共に生活し、支えている存在に気づき、その人たちとつながることが、この子たちにとって健康で生きていくための知恵であり、地域がどのように支え合って生きているのか考える大事な場となったと思っています。こんなつながりの中で地域の人たちは生きているということを知り、将来つながってほしいと願っています。

地域の子は地域で育てる—地域とのつながりを大事にした教育—

竹富島の人たちの願い、思いとは何かを考えたとき、この子たちが 15 歳になると島を離れます、しかし、いずれ島に戻ってほしいということだと思います。戻るためだけではなく、島を離れるこの子どもたちに、しっかり育ててほしいというのかな。この子たちは地域の人とつながって生活しています、生きています。ですから私たちも地域との連携が大切だなという思いもありました。この思いを受け止めて、教育をすることの大切さを学びました。

このことを実践論文にまとめた^{vii}こともあります。そういう形に残すことで、島の人からよく先生がんばったね、と声をかけてもらったときには、やっぱりうれしかったです。「宿舎に入らない先生はいらない」といわれてスタートしたので、先生がんばってるねと言われたときには、認めてもらえたな、私たちのがんばりをちゃんとみていてくださったんだなということでもうれしくなりましたね。私たち教師は、地域の願いを自分たちがどう受け止めて、子どもたちと、あるいは地域の方たちと自ら関わっていくかっていうのが大事だと思います。

その結果が、心に残る成人式と書いてますが、担任でもなかった私を招いてくれた。そのときに、この島の人たちが、「おかえり！先生！」って歓迎してくれたんですよ。すごく嬉しかったです。私の3年間、頑張ってた良かったなって思える瞬間でした。

(9) 地域の変化を知った二度目の明石小学校

それから、私は二度目の明石小学校にいきました。がらりと変わっていました。何がかというと、前は島の方たち、開拓のルーツを持つ元々の地域の方たちだったんですね。それが保護者も県外からの移住者がほとんどになっていました。または学校職員の体制も、担任の先生方はすべて沖縄本島からの先生方でした。一度目の赴任のときの地域の方々は、もう隠居していて、地域の一員としていろんなかかわりはしてくださったんですけど、学校から一線引いている感じ、随分変わったなあという思いで過ごしていました。

竹富小中の時もそうだったんですけど、明石小では、教師一人一人の思いでいろんなことが変わっていくのかなあという思いをしました。中には、地域の伝統行事をあまり大事にできないというのかな、学校の行事が一番でしょという事を地域の人に言ってしまったり、地域の方々の声に対し、「何であんなこと言うの」と反発して、地域の方と対立してしまったりした方もいました。それは、先生自身もちょっとつらそうな様子でした。その時にね、やはり先輩たちが築き上げてきた学校と地域との信頼関係も大事にしながら、築き上げてきた教育というのも大切にしないといけないなあということを感じました。

もちろん、地域になじんでいる先生たちもいました。明石エイサーがあるでしょ？そしたら、ある先生が中頭出身で、三線もできてエイサーも上手な先生だったんですよ。そしたら、やっぱりもう地域に絶賛されるわけ。だから、自分が持つてるものを、やっぱり良いかたちで出せる人っていうのはまた、最高だなって思うんです。ラッキーですよ、この先生は。それからもう1人はね、あまりしゃべらないけど絵の上手な先生がいて、この先生と絵を描いていたら楽しいと言って頑張る子がいました。だから、それぞれの先生たちの得意とするものであったり、そうじゃなくても自分の生活であったり、自分が歩んできたこれまでの学びであったり、そういうことを子どもに返していくことで、私はつながりができるんじゃないかなと思うんです。そういうつながり方でもいいと思います。

(10) 地域と子ども、保護者と子どもつなぐ実践を深化させた八島小学校

八島小学校は私にとってとっても大切な学校なんです。ここでは、たくさんの学びがありました。「命の授業」を4年生の保健、5年生の理科・道徳、6年生の保健の授業において、担任の先生方と学級の実態を確認しながら、実践¹¹⁾してきました。ほかにも、学校医の先生との連携をした研究授業を小学校体育研究会の県の研究大会に向け実践しました。学校の研究指定としては、「食育」の指定で「お弁当の日」に取り組んだり、その中で食育クラブ「八島ピアっ子」のとりくみ¹²⁾もありました。

また、琉球大学との共同研究で大学の先生との出会いがあったり、たくさんのことを学ばせていただきました。JICAの研修員に対する講演で、「学校保健」の重要性について話をしました。新規採用養護教諭の指導も実施するようになりました。これらはこれまでの自分の学びを整理し、アウトプットする大事な機会となりました。

ここでは、子どもと地域をつなぐということを意識した授業について紹介します。子どもたちと助産院を訪れるという授業^{x)}です。この授業は、4年生の担任が産休に入る前におこないました。実は八島小校区には、助産院があります。そこの助産師さんは小学校の保護者ということもあり、協力的で授業が実現しました。この学年は2クラスありましたが、子どもたちのために自分たちにできることは、やっぱりやりたいと思って出かけました。

助産院では、実際に胎児の心音を聞いたり、超音波で胎内の様子を見せてもらいました。へその緒・顔・背骨などを確認した時には「すごい、目がみえた」「へその緒ってこうなっているんだ」などの

声が聞かれました。子どもたちはもう、うわぁー！と声をあげて驚いていました。そして担任から、「待ち望んでいた赤ちゃん」「自分が母親になる」という思いなどについて語ってもらいました。みんなもお母さんのお腹の中で大事に守られてきたという思いを重ねて、命の尊さを伝える担任のメッセージは、子どもたち一人一人の心に響きわたりました。

校区内にある助産院を訪ねた後に書かれた「お仕事リーフレット」で、ある子は「将来、助産師になりたい」と記しています。私たち大人が、人と深く関わる姿を見せることで、子どもたちは将来への夢やあこがれを表現するようになりました。また授業の感想では、担任と少し距離をおいていたはずかしがりやの男の子が、「たかこ先生の赤ちゃん早く元気に生まれてほしいです。赤ちゃんは男子か女子か知りたいです」と書きました。また、お父さんと離れ寂しい思いをしている女の子は、「大切な一つの命を守ることはとても大切、赤ちゃんは、親にとって大事で大事に見守られすくすく育つ」と感じてくれています。子どもたちは、男の子も女の子も日々大きくなっていく担任のお腹を大切に見守り、担任のお腹の赤ちゃんにも優しい声かけをしていました。

この実践で考えたいことは何かというと、もちろん命の尊さ、生命の誕生の奇跡ということもあります。しかし、それだけでなく、私は、地域とつながるってことなんです。この子たちに、いざというとき何かがあったときに、周りに大人がいるよ、ちゃんとあなたたちのことを見ているよ、相談できる大人がいるよということを何かのときに思い出して、いざっていうときにはつながってほしいという思いで行った取り組みです。地域に助産院があるということ、そこで働いている大人が命を大事にした仕事をしているということ子どもたちが気づくことが大事だと考えています。このようなとりくみは、学校医との先生との連携を意識した実践でも大事にしました。子どもたちが医者という存在とつながることで、自身の健康状態や生活習慣を語り合ったり、子どもの生活習慣を気にしてくれる医者という大人に出会うことで、子どもたちが、この石垣島で生きていく術となると思い、授業に取り組んできました。これが竹富小中の時から続けてきた、島（地域）で生きていくために地域と子どもをつなぐということです。

(11) 次の世代に実践をつなぐことを意識した登野城小学校

現在、私は登野城小学校に勤務しています。³⁾登野城小学校には598名の子どもたちがいます。やっぱり子どもたちを見てみると、これだけの人数がいると、さまざまな環境の子がいます。ですから、担任と、この子のためにできること、声掛けであったり、ただ寄り添うだけであったり、側で見ただけだったり、この子にとってどんなかわかり方が一番いいんだろう、どうすればこの子が大事にされているって伝わるのかを相談しながらやっています。そのために、担任の動きを意識しながら仕事をすることも多いです。だから、私の仕事は5時からだった。(笑)5時後、先生たちがほっとしてから、保健室に駆け込んでくる人が多いんです。気になる職員いるじゃないですか。絶対今日駆け込んでくるなあとか、子どものこと聞きにくるなあとわかるから待っているんですよ。そうして、担任の先生からの相談を終え、ああ、先生帰った、OK、大丈夫だなんて、それから自分の仕事をし帰っています。

つなぐ、つなげる養護教諭

また、これまでのさまざまな実践を研修会や研究会で発表する機会がありました。その際、教育事務所指導主事の先生が、これまでのいろんな私の取り組みを見て、私にこんな言葉をくださいました。

「良子先生はね、つなぐ、そして、つなげる養護教諭です。」

私が大切にしているのは、子どもと子どもをつなぐ。ケンカする子がいますよね？何だよ！とお互いに分かり合えない子がいます。そういう子どもと子どもをつなぐ。そして、子どもと担任をつなぐ。

担任に、実はこの子は今こんな状況ですよ。今日、お母さんが保健室に来て、こんなことを伝えてきましたよ。だからちょっと気を付けて見てください、声を掛けてください、ということもあります。

そして、子どもと保護者をつなぐこともあります。保護者が保健室に来て、今こんなことで、うちの子反抗期でもう困ってますっていう話をしてくれます。でも、それって誰にでもやってくることでしょ？そういう発達段階の話をする、泣きながら、分かりました、私の言葉がこの子にちょっときつかったかもしれませんが、自分を振り返ってくれるお母さんもいます。このように子どもと保護者をつなぐこともあります。

子どもたちは、この後中学校へいきます。ですので、中学校の養護教諭にもきちんと連携をとります。卒業してしばらくして、「良子先生、あの子のあの時のことはどんなことでしたか」という問い合わせもきいたりします。この子たちは中学校、高校へと行きます。ですから、先生方が何かのときには声をかけあって、子どもたちの健やかな育ちのために連携をしています。それから、子どもと関係機関をつなぐ、子どもと地域をつなぐという仕事もあります。

そういうことも意識しながら私は40年勤めてきました。子どもたちは、いろんな関わりがあり、自分を大切に成長していくと思います。私たちの一番の喜びは、このような関わりを通じて、子どものその笑顔に出会うこと、真剣なまなざしに触れることです。その時に、もっと頑張ろうって思えます。これがこれまでの私自身の学びから得た養護教諭の大事な在り方だと感じています。このような思いを若い先生たちにつないでいきたいです。

子どもが自分を大切にすることを目指した「命の授業」

次に、私がずっと大事にしてきた「命の授業」について紹介します。これも若い先生、養護教諭の仲間につないでいきたい授業です。登野城小学校でも、担任、理科専科と「命の授業」にとりくんできました。決まった授業をするというよりも、その時の担任と一緒に話し合いながら授業づくりをすすめています。

担任と取り組んだ「命の授業」ークラスの違いを大事にー

まずは、4年生の保健の授業です。私は毎年、この単元を大切にしています。「育ちゆく体と私」ということで、4時間扱いの単元です。今年は特に丁寧に、担任と授業づくりをしました。登野城小学校の4年は3クラスあるのですが、私がまとめて一斉に行うことはしません。1クラスずつ、どんなに時間をかけても担任との授業づくりをしています。それはクラスの子どもの違い、担任の思いも違う。その状況にあわせて授業をつくっていくことを大事にしているからです。もちろん、クラスごとに子どもたちの反応も違い、たくさんの気づきを教師も得ることができます。

子どもたちは、自分の体の変化を恥ずかしいと言います。その恥ずかしいっていう気持ちを、私はすごい大事にしてあげたいんです。でも、正しいことを子どもたちに伝えたい。そして、自分の成長を、初潮や精通という変化を安心して迎えてもらいたい。4年生の保健ではそこを大事にしています。5年の理科では、「人のたんじょう」として、自分の成り立ちを学ぶことで自分を好きになっていく、こうして、2つの単元を通して、子どもたちが自分を大切にできるようにしたいと思っています。そして、あなたのことをちゃんと見ているよ、あなたのことをちゃんと分かっているよ、という大人が周りにいるということ、子どもたちに伝えたい。そういう思いを担任と共有しながら授業づくりをしました。

私は、子どもたちにちゃんと向き合いたいなと思いがち、思春期保健相談士という資格も取って授業をしています。教材としては、体の変化は脳とつながっているっていう話をするため、脳モデルを準備して、子どもたちに授業しています。子どもたちは、すごい飛び付いてくれます。ですから、

子どもたちが、恥ずかしいって思うような内容ですが、自分の体のことなので、真剣に聞いてくれます。子どもたちは授業のあと、必ずもう触りたいんですよ。赤ちゃん人形やいろんなものを。だから周りに集まってきてくれます。そして笑顔を見せたり、なぜ？って真剣なまなざしで質問をする子もいます。すごいそれが嬉しいですね。

そして何より、お家に帰って、お家の人に、「今日ね、保健の授業でこんな話を聞いたよ」ってお母さんに伝えてくれます。それから日記で書いてくれます。この授業のあとに、実は、お母さんが保健室に来てくれました。

「先生、この前の保健の授業ありがとうございました。お家に帰ってきて、子どもはランドセルも持ったまま、お母さん、聞いて、聞いて、聞いて！今日、こんな話を聞いたよって話してくれました。そこでさらに自分も話のできたので親子の会話が広がりました。きちんと伝えてくださってありがとうございます。」

こんな風に話してくれたんです。嬉しかったですね。

理科専科と行った「命の授業」—子どもたちの学び—

今度は理科での実践について紹介します。竹富小の時から続けている5年生の理科です。「人のたんじょう」です。これは、十年以上続けてるんですが、人の誕生の人って、前はカタカナのヒトだったんですよ。わかります？（笑）カタカナのヒトで、すごい不思議だったんです。動物的な扱いだっただのかな？ってね。何年前から、漢字の「人」になっています。授業を続けていると、変化も見ることができてすごい楽しいですよ。子どもたちに言ったらびっくりします。自分もちょっと歴史を感じたりするんですけど。

【教具としての赤ちゃん人形】

授業で使っている赤ちゃん人形。これは、わざわざ授業のために作りました。この赤ちゃん人形を、抱っこしたいって来るのが、ほとんど男の子でした。不思議だなあと思ったんですけど、女の子の感想の中で、「男子が赤ちゃん好きだということが分かりました」って書いた子がいて笑ったんですけどね。これは、担任の指導で、授業の後にすぐ「日記を書いてね」と言っていたので、このような感想も知ることができました。担任からのフィードバックで、字は汚いけど、最後のほうですね、「僕たちが生まれたのは奇跡と、良子先生が言ってくれました。これからも自分の命を大切にしていきたい」と書いた子がいました。この子も家庭にいろいろある子なんですが、私の授業をちゃんと聞いてくれたことがすごく嬉しかったです。

【赤ちゃんはどのようにお母さんにつながっているか】

子どもたちが、一番興味を持ってくれたのが、へその緒です。さあ、皆さん、赤ちゃんのへその緒は、お母さんのどこにつながっていますか？

（学生が恐る恐る）胎盤。

ピンポン。胎盤です。あのね、こんな感じです。子どもたちもおそろおそろ「胎盤？」っていう子もいれば、堂々と、「はい、はい、はい、はい！栄養もらってるからお母さんの胃！」って。ほんとに出ましたよ。いっぱいいましたよ、お母さんの胃と言った子。そしたらね、ある男の子、これに答えるのはほとんど男の子でした。そしたら、ある子が、「いや違うだろ、おい、酸素もらってるって言っただろ？お母さんから。はい、はい、はい！肺。」と言ったんです。いやいや、ほんとの話ですよ。「お母さんの口からつながってる」とかさまざまなことを考えてくれます。でもね、私は答えが合ってる、合っていないじゃなくて、真剣に考えて授業に参加してくれるこの子どもたちが大好きなんです。私の最後の授業だったんです。この5年2組の理科の授業。この授業を、担任も一緒に来てくれて、教科担任ももちろんいます。教頭先生も来てくれました。周りの大人、子どもたちと一緒に大爆笑でした。でも、これが子どもです。だから、私は、「良子先生が、あなたたちに正しいこと教えるからね」

と、胎盤の話に入りました。

【子どもたちの誕生にかかわるさまざまな感情を受け止める】

授業を通して、また、子どもたちの日記を読んで感じることは、子どもたちって、お母さん大好きなんですよ。皆さんもそうじゃない？私もそうですよ。母大好きです。だから、この赤ちゃんが、お母さんのお腹の中でどういうふうに着てきたのか、そして、誕生のときの様子もすごく真剣に聞いてくれるんです。ここに反応してくれるのがまた男の子なんですよ。だから、みんな、お母さんが大好きで、お母さんとのつながりを感じると嬉しいんだなあって思っています。もちろん、自分が生まれてきたときの話だとか、いろんな人にはいろんな感情がありますよね？その、嫌だとか、嫌いだとか、怒ったりとか、泣いたりとか、いろんな感情一つひとつを、丁寧に認めてあげる、理解してあげることで、私たちって成長していくんだなあって思っています。私は、子どもを通していろんなことを、なんか私のほうが学んでいます。学ばせてもらっています。そんな日々ですね。

【授業でみせる子どもの表情から学ぶ】

そこでの子どもの様子をお話ししますね。まず紹介する子は、担任が「もう大変なんですよ」というような子です。この子が、すごく笑顔になって話を聞いてくれました。嬉しかったですね。また、心疾患があり、いつもはおとなしい子なんですが、自分の誕生のことをいろいろお家の人から聞いてるんでしょうね。なんか真剣に聞いていましたね。ある子はちょっと登校しぶりのある子なんですが、この授業は一番前の席で参加してくれたんですね。もう真剣に。それを担任はすごく喜んでくれました。あるすごいやんちゃな子は、違う顔っていうのかな、学級では見せない、あるいは友達と遊ぶときは見せない、そういういろんな顔を見せていました。転校してきたある子は、とても賢い子なのですが、担任を困らせて、保健室に担任が相談にくるような子でした。この子が、ずーっと赤ちゃん人形を抱っこして、離しませんでした。ほかの子が、貸して、貸して、って言っても離さず、最後まで抱っこしていました。子どもたちってね、さまざまな顔を持ってるんですよ。お家で見せる顔、学級で見せる顔、友達との顔。保健室でしか見せない顔もあります。こういう授業を通しての顔もあります。いろんな顔をね、私たちは見ながら、その子に寄り添っていければいいなあって思いながら授業をしています。すごく、いろんな表情が見れる、いろんな顔が見れる授業です。でも、みんなの表情を見ると、ああ、やって良かったなと。授業づくりは確かに大変です。でも、そこから担任といろんなことを共有したり、子どもたちのいろんな声を聞いたり、そこから見えてくるものっていっぱいあるので、一つひとつ、1時間、1時間を大事にしたいなと思っています。私にとってはそのための限られた時間の中で、教材を工夫しながら授業をしてきました。

3. 友利良子教諭が伝えたい、島に生き、島で教える覚悟とは

(1) 八重山において「島で生きる」とは

八重山において「島に生きるとは何か」ということを少しお話したいと思います。あくまで島で生きるというのは、私の場合ですよ、それも八重山という地域でのことです。八重山において島で生きるとは何か、それは、人と人とのつながりによって成長していくことだと思っています。私自身、先輩や島の人からたくさん言葉ももらって成長してきました。それから、島の行事に入っていき、島で何かあったときには声をかけてもらう、そういうつながりを通して人とつながっていきました。その中で、島の人たちの愛情だとか、相手を思いやる心だとか、そういうものにいっぱいふれることができました。それが自分の成長につながったなと思っています。

それから、島は、伝統行事がコミュニティのつながりを強くしています。それと同時に、人を成長させる大きな場となっています。これはいろいろな島で見てきた、特に竹富島の行事に触れたとき、島の人たちが大切に子どもたちを育てていることに触れたとき感じました。そうすることで、子どもたちが本当に成長しているんだな、子どもたちの大切な根っこをつくっているんだなと実感しています。

私に関わったある子は、お父さんが波照間島の子でした。夏休みになるとお父さんに連れられて、かならずムシャーマ（筆者注：波照間島で行われる旧盆の行事）に行くんですよ。そこで兄弟で太鼓をたたいているんですね。この子たちから直接聞いたことはないんですけど、たまたまケーブルテレビで見たんですよね。その時、この子たちとつながれると思って、夏休み明けすぐにこの子とあって「夏休みにムシャーマ行ったの？」と聞いたら、「うん」と言って。私はうれしくて、自分の波照間島勤務の話とかしたんですよ。そして「あなたは、波照間島で生まれてもないのに、生活もしていないのに行くの？」と聞いたら、「うん、俺はやりたくて、お父さんに頼んで夏休みになったらいくんだ。」と言ってね。私が、「そしたら島の人達にすごいねって、いっぱいほめられるでしょ。」というと、「うん」と言ったんです。ここで認められるということでこの子のよりどころになっているとすごい感じたんですね。だから、この子にとっての波照間島は自分の居場所になっているんだなあと感じ、この子がこれからも波照間島とつながっていけることに安堵したんですよ。四カ字の豊年祭でも竹富島の種取祭にしてもそうですよ。踊れる子は、踊れない子からすれば羨望のまなざしで見られるから。だからこの子が祭りで凜として立っているのは、この子がみんなに認められているからだとは思ったんですね。このことを学校でも最大限評価してあげて、そこからこの子とつながっていったらいいと思っているんです。そして教師には、この子にとって「波照間のムシャーマ」って大事な「根っこ」「土台」だったと思うんです。これを、キャッチできるそんな感性を身につけてほしいと思っているんですよ。

私が島で生まれ育たず、かつ何も経験していない状態だったら、きっとこの子のこういう部分をキャッチできないと思うんです。ただ、すごいね、上手だったねと終わると思うんです。「この子にとってこの祭り・行事がナイスだ、根っこだ」とその子の思いに迫れる感性、そんな風に子どもと地域の関係を見ることができるとは、私が石垣島の宮良出身ということが生かされている点だと思うんです。八重山の島々で生きてきた人々が共通に持っている感性なのではないでしょうか。

八重山から出て都会で生活をしていて、行事とかに帰ってくる人たちがいます。そういう人たちの言葉を聞いていると、必死に都会で生きている自分たちが、故郷に戻ってきて、軽い言葉でパワーをもらったということではなくて、自分たちが生まれ育った、自分の中に流れているそういう大切な「根っこ」を再び呼び起こして、体にしみ込ませているんだろうなって。行事もそうだけど、島ことばに触れて安堵するっていうかね、癒されてとかではなくて。私の双子の妹が東京に居て、豊年祭は必ず帰ってくるんですよ。盆、正月は帰ってこれなくても。それはなんだろうって思ったら、それは小さい頃から耳にしてきた豊年祭の太鼓。それから唄。着物。そういうもので、自分の生まれ育ってきたルーツをたどっていくんだろうなって思っています。それが自分の中で消せない育ちなんですよ。

私ですね、島の行事を通しながら、不思議に感じたことがあるんです。島で育っていない、竹富島でそだっていないうちの息子が6年生の時に、私はもう転動していたんですけど、息子をつれて種取祭を見に行っただけです。そしたら、この子がものすごく感動して、中学三年生のときに一人で竹富島の種取祭に見に行っただけです。新聞記者が、ここで中学生が何しているんだろうと思ったらしく取材をうけたんです。その時、うちの中学校三年生の息子が語ったことが、母に連れられてみた種取祭を自分できちんと体験したかった。そして、不思議だったのがずっと島の行事が続いている、島の人は祭りの準備から大変で夜も寝ないで、祭りを夜通しやっているのにも関わらず、島の人たちがすごく元気だと、それにおどろいたって、息子が言ったんです。私もその言葉を聞いて、そんなこと感じていなかったのにおどろきました。竹富島に育っていない息子だから感じるものがあつたらしく、すごく感動したみたいです。すごいパワーだと。この島の人達がどンドン、どンドン元気になっていくことに驚いた、その島の行事が一年に一度、それに向けてまた来年という思いをつながげながら、みんなで生活をしていっているだろうなと子どもの話や息子の話、島の人の話を聞きながら感じたものです。

(2) 島で教える教師に必要なこと

① 島の文化や生活を理解し、受け止めること、それを教育の中心にすえること

島で教える教師として必要なこと、まず、島の文化や生活を理解しなければならないと思います。そして理解するだけではなくて、きちんと受け止める事、そして教育の中心に据える事の大切さだと思います。そうすることで島の人達と良い連携がとれて、子どもたちのいい成長につながっていくなあ実感しています。これが仕事の幅を広げるということですね。

② 子どもの心に寄り添うことが、子どもが安心して育つことにつながる

子どもの心に寄り添うこと、これが、子どもが安心して育つことにつながります。子どもの幸せの第一歩なんですよ。子どもの声を聴くこと、ただ聞くじゃないですよ、ちゃんと心で受け止めてくださいね、そしてあなたをみているよ、大丈夫だからね、という思いを伝えてください。

ある時、保健室に、担任への不満を持ってきた子が来ました。その子と話をし、「先生に話を聞いてもらいたいんだね？」と聞くと、「うん」って言いました。それで、私が、担任の先生にね、「ねえ、先生。あの子がね、先生と話をしたいと思ってるはずだから、話を聞いてあげて、この子に寄り添ってあげてね。向き合ってあげてね」って私が言ったんですよ。そしたら、「分かりました！」って元気に行きました。若い情熱的な男性教員だったんですけどね。そしたら、またこの子が保健室に訴えに来たんですよ。「どうしたの？」って聞いたら、「先生、はっさ、もう嫌さ！」って。担任が「先生と話しよう！」と言って、自分と向き合って座ったんだって。それでももう嫌だったって。

向き合うとか、寄り添うってということについて、皆さんには考えてほしいなあと思います。必ずしも、子どもを自分の前において話をすることが寄り添うことではないですよ。子どもにとったら、ただ先生と目が合うだけで、あるいは先生がそばにただ安心したりするかもしれません。先生って俺のこと、自分のこと見てくれてるって思えるだけで安心する子がいるかもしれない。あるいは、ちゃんと「先生、先生、聞いて、聞いて」って話をしたい子がいるかもしれない。例えばね、私はうなずくだけのときもあります。側にずっと寄って、ぼんとふれるときもあります。その子にとって一番どんな寄り添い方がいいのかなということを考えながら、子どもとかかわってもらいたいなあと思っています。だから、一人一人の子どもたちを理解するっていうのかな。やっぱり子ども理解から始まると思うんですよ。その子の家庭環境であったり、この子の友達関係であったりとか、そういうことを見て、子どもたちとつながってほしいんです。それが私の願いですね。子どもたちに寄り添う、子どもたちに向き合うということ、大切にできる教師であってほしい。あるいは、そういう素敵な大人であってほしいなって私は思っています。

③ 保護者の思いを受け止める

それから、私は保護者がもたらす担任への不満を聞いてきました。子どもへの対応の仕方、先生の言葉遣い、子どもに声掛けしてくれないんですよ、そんな声が保健室に届きました。直接言ったら怒りそうだから、先生から伝えてねと言われたこともありました。いろんな親の思いがあるんだなあ保健室に来る保護者の声に耳を傾けながら感じています。みなさんには、保護者の思い、願いを受け止められる先生になってほしいと思っています。

④ 担任がさまざまな人とつながって子どもを支えること

担任になったときには、子どもを支えるため、養護教諭など、いろいろな人たちとのつながりを大切にしてください。保健室には子どもの情報がたくさんあります。その子のことについて、養護教諭に声をかけて聞いてください。一緒に子どものために何かができるはずですよ。子どもの本音だったり、保護者の声であったり、そういうのが保健室には届いています。ぜひ声をかけるようにしてください。

⑤ 学び続ける教師に

私は、まだまだ一人前だと自分では思っていないです。ですから、いつでも、いつまでも、学び続けるっていうことを大切にしていきたいと思っています。私もあと一年ですが、学び続けることってとっても大事です。ですからみなさんもどうぞ、謙虚に学び続けるそんな先生になってください。

(3) 島で生きていく覚悟とは

この授業の中である質問をいただきました。すごくどきっとした質問でした。その方は、私に「先生にとって、島で生きていく覚悟とは何ですか」と聞きました。その時はうまく答えることができませんでした。そしてその質問はずっと私の中で繰り返されいました。これは、私自身が「島で教師として生きていく」中で、常に考えてきた問いだったんです。私にとって「島で生きていく覚悟」とは、「島で教師として生きていく覚悟・決意」と同義です。教師として生きていくということを抜きに私の島の生活は考えられません。そんな生活をこれまでの40年間歩んできました。その中でこの質問に対する答えを改めて考えてみると、次の2つかと思います。

一つ目は、新採用で赴任した波照間島での校長先生の言葉です。「島にも子どもがいる」という部分です。私が教師としての人生を歩み始めたとき、投げかけられたこの言葉、私が教師として向き合う子どもがそこにいる、そこに私の仕事があると覚悟したんです。だからこそ、異動の際には、異動先の島を思い浮かべ、そこに住む子どもたちを思い浮かべ、心の準備をしてきたんです。どの島・集落であってもそこに「子どもがいる」限り、私はしっかりとこの子どもたちに向き合わなければならぬ、それが私の選んだ教師という道だと思ってやってきました。

二つ目が、思春期の子どもたちからもらったことです。それは、子どもに本気で向き合うこと、逃げないことです。これは養護教諭としてだけでなく大人として、思春期の声に応える大人の責任は大きいと思っています。思春期の子どもたちに質問されたら、子どもにこんなこと言わないよってはぐらかす大人はいっぱいいます。あるいは聞かないふりをする大人もいます。でも、私は、子どもたちのこの疑問には、じっくり向き合える大人になりたいと思っています。逃げたくないですね。もし、あなたたちが現場に行って、子どもたちに何かを聞かれたときに、そうだねって、じゃあ一緒に考えてみようかとか、先生これはすぐ答えられないから、あとでいい？とか。そういうことが、子どもと向き合うという時には大事なことだと思うんです。

それから大人になった教え子とのつながりをみると、やっぱり小学校のときのことがベースになっていると感ずることがあります。小学校という時期に、教師がどのように子どもと向き合ってきたか、かかわってきたか、それがその後のこの子たちの島での生活に大きな影響を与えます。島に生きる大人として、先輩としての姿をしっかり見せ・悩みを聞いたり相談に乗ったりすることで、子どもたちが大人になったときに、島を支える大人としてつながっていきたく感じています。

そして私はこれまで育ててくれた八重山の先輩たちの思いを引き継いでいきたいなあと思っています。私は、これまで先輩たちからたくさんの言葉をいただいてきましたと言いました。その思いを大事にして、少しでも多くの教師につないでいきたいです。

4. 友利良子という教師人生から学ぶこと

これまで見てきた友利良子教諭のライフヒストリーがしめしていることはなんだろうか。彼女の人生そのものが「教師として島に生きる」ことであった。聞き取りを通じて感じることは、教師として語ることに、島の生活者・先輩として語るものが分けられているのではなく、統一されていることだ。彼女は、「私にとって『島で生きていく覚悟』とは、『島で教師として生きていく覚悟・決意』と同義です」と述べている通り、教師として「島で生きていくために大事なこと」は、島の学校教育活動の中でも教育の重点とすべき点であった。そのことは以下の3つにまとめることができるであろう。

【島の伝統文化・行事など島に生きるための土台・根っこを大事にする】

山口(2019)でも述べたように、離島における学びとは、「島に生きる希望」と「島から出る希望」の両方が追求されることであり、自尊感情を育む学校づくり、授業づくりが重要となっている。島々の行事・芸能は子どもにとって「根っこ」(アイデンティティ)をつくる大事なものであった²⁴。その「根っこ」が、子どもの自尊感情につながっていた。教師は、例えば学校でさまざまな問題があったり、学力的に課題があったりしたとしても、子どもが大事にしている島の行事や文化、もしくは島の自然など、この子の「根っこ」を大事にし、そこに寄り添いつながること(ほめること、認めることなどを通して信頼関係を築くこと)をまず大事にすることが重要である。そのことを、友利良子氏と子どもとの関わりから再確認することができるだろう。彼女の子どもたちに対する関わりは、この「根っこ」を大事にすること、具体的にはそれを認め、思いっきりほめてあげることだ。彼女はそこに子どもとつながるきっかけを見出している。どのような子どもであっても、その子が一番大事にしている部分をキャッチし、そこを共有することを通じて、子どもとの信頼関係を作り出していく。これを友利良子氏は「感性」と呼んでいる。そしてこの「感性」こそが自分が島に生きてきたことによる経験が活きている部分であるという。聞き取りの中で、島に生きていない人間であってもその「感性」はつくられていくと彼女は言う。島の伝統文化だけでなく島の生活、生き方への共感的理解があり、その島(地域)の生活に浸ることで、島外(八重山以外)から来る先生たちでも「根っこ」を実感し、子どもたちの「根っこ」に気づく「感性」がづくりだされていく。子どもたちの「根っこ」を大切し、それを大切にできる教師の感性を養う事、これが学ぶべき教師の専門性であろう。

【子どもと地域をつなぐことで地域に生きる子どもを育てる】

2つ目が、「子どもと地域をつなぐ」という点である。竹富小中、八島小の実践からもわかる通り、子どもたちが地域に生きる市民として育つため、地域の施設や大人とのつながりを作り出していくことが実践を通じて大事にされている。社会科の学習等で扱われる社会のしくみを、具体的に島で生きている人々(地域の医者、助産院、栄養士や保健師など)に出会わせることで、より具体的に子どもたちに実感させている。ここに養護教諭がもつ健康・保健という専門性が積極的に発揮され、担任との協働のもと学校教育の単元に位置づけられ実践されている。拙稿でも指摘した通り「島に生きる希望」をつくりだす教育実践である。現在の貧困や差別などの現実などをみる時「人間らしく生きること」がもっと追求されなければいけない、このような時だからこそ、養護教諭の持っているネットワークを生かし、社会とつながる「公衆衛生」の学びが重要となっている。教師が、子どもたちにとって「意味ある他者」に出会えるコーディネート力を持つことが求められている。

【子どもに寄り添い、自尊感情を高める】

そして3つ目が、友利良子氏から何度も強調されてきた「子どものため」「子どもに寄り添う」という点である。友利良子実践では、保健室で見せる子どもの顔を大事にし、学級での人間関係や学習状況、担任との人間関係、家族や地域の生活状況、保護者の状況や価値観を具体的に把握しようと努めてきた。そして、その子にあったかかわり方、つながり方を模索してきた。この丁寧な「子ども理解」こそが、ライフストーリーから教師の専門性として学ばなければならない最大のものであろう。担任は養護教諭と丁寧な情報共有を通じ「子ども理解」を深め、それらの情報を有効に活用して授業をより子どもの現実に沿ったものにし、子どもの学びを豊かにしていくべきであろう。

今後に向けて

廣田(2019)は、へき地教育の課題について、学校を支える地域コミュニティが、もはや立ちいかないくらいに疲弊していると指摘したうえで、「へき地教育の問題は、究極的には、もはや教育の問題としてではなく、地域の維持と再生の問題となっているのだ。そう考えると、実は地域に密かに

誇りと愛着を持ちながらも、地域にくらしていくすべや展望を持たない子どもたちは、愛着とは別に地域から離れることを本気で考えながら日々学ばざるを得ないのであるⁱⁱⁱと述べている。沖縄の離島においても同様の状況であろう。その中で島の伝統的な暮らしを大事に生きてきた人々が、離島では健在である。この方々の思いを受け止め、生きてきた知恵に学ぶことの重要性は変わらない。島の現実を受け止めたうえで、「どう生きていくのか、そこでよりよく生きるとはどういうことか」の知恵を、子どもたちと学ぶ実践を創造していかなければ、子どもたちは幸せになれない。廣田がいうように、地域の現実を直視し「地域に開かれたカリキュラムを構成する力」を教師が持つことが今こそ重要であり、そのためにも友利良子氏の教師人生から学ぶことは大きい。

本稿は、共同研究「沖縄における『格差と学び』をめぐる臨床教育学研究—教師教育の質的向上をめざして」（研究課題／領域番号：17K04561、研究種目：基盤研究(C)、研究代表者：村上呂里・琉球大学教育学部・教授、研究期間：2017-2019年度）に基づく研究成果の一部である。また、その報告書へ掲載した論文「離島出身教師のライフストーリーに見る教師の専門性と離島へき地教育の豊かさ—養護教諭友利良子実践から「島に生き、島で教える覚悟」を考えることを通じて—」へ一部加筆修正を加えたものである。

参考文献

- 平野婦美子「ほるぶ自伝選集／女性の自画像 5 女教師の記録」ほるぶ 1980年5月1日
- 宮里テツ「テッチャン先生はろくおんてえぶ 沖縄・離島の女教師の記録」ニライ社 1986年3月15日
- 大塚勝久 写真集「うつぐみの竹富島」琉球新報社 2005年
- 玉井康之「現代におけるへき地・小規模校教育の特性と“へき地”のパラダイム転換の可能性」玉井康之編著『子どもと地域の未来をひらくへき地・小規模校教育の可能性』教育新聞社 2006年 22-30頁
- 沖縄タイムス「この島のものづくり『かなさうちな一むん』総集編」沖縄タイムス社 2012年
- 石垣市立八島小学校授業力向上研究会編「八島っ子の学びの足跡—豊かな学びから学力をはぐくむ」琉球大学教育学部発行 2012年
- 山口剛史「第22章 離島・へき地教育」上地完治・西本裕輝編『沖縄で教師をめざす人のために』2015年7月 協同出版 262-271頁
- 玉井康之「現代におけるへき地・小規模校教育のパラダイム転換の理念と可能性」川前あゆみ・玉井康之・二宮信一編著『豊かな心を育むへき地・小規模教育 少子化時代の学校の可能性子どもと地域の未来をひらくへき地・小規模校教育の可能性』2019年 学事出版 12-21頁
- 山口剛史「教師として島に生きる—学びとケアをつなぐ」『教育』NO.881 教育科学研究会 2019年6月1日 37-44頁
- 廣田健「直面する困難を子どもとともに悩み、学ばせへき地教育の可能性」『教育』NO.881 教育科学研究会 2019年6月1日 45-52頁

ⁱ 山口剛史「第22章 離島・へき地教育」上地完治・西本裕輝編『沖縄で教師をめざす人のために』協同出版 2015年7月 262-271頁

ⁱⁱ 平野婦美子「ほるぶ自伝選集／女性の自画像 5 女教師の記録」ほるぶ 1980年5月1日 昭和15年に西村書店より出版されたものの復刊として発行されたものを利用している。

ⁱⁱⁱ 宮里テツ「テッチャン先生はろくおんてえぶ 沖縄・離島の女教師の記録」ニライ社 1986年3月15日

^{iv} 八重山毎日新聞 1986年10月18日の土曜レポート「健康管理に不安訴える 養護教諭の未配置 不公平な八重山の扱い」として、インタビューと写真がとりあげられた。この時には、実名報道はされていない。

^v 1986年11月22-24日に開催された沖縄県教職員組合第33次教育研究中央集会、第10分科会学校保健にお

いて、八重山支部からの報告「兼務問題について」というレポートが出された。集会の報告集「沖縄教育 第33次教育研究中央集会」に、その討議内容と教研速報が掲載されており、はじめての中央教研の感想として、田盛良子名で「今、八重山では養護教諭の兼務問題があり、3名が不正常的な勤務が強いられた十分な子どもたちとの触れ合いもできず、健康教育に支障をきたしておりたくさん問題が出てきています。この状況を同じ仲間の皆さんに是非わかってもらいたいと思います。『目の前の子どもたちを大事にするために』常に兼務解消を叫んでいきたいと思っています」と感想がつけられている。

^{v1}この時の写真が、写真家大塚勝久氏の写真集「うつぐみの竹富島」琉球新報社 2005年に掲載されている。

^{v2}友利良子「子どもたちの健やかな心と体づくり～保健室と地域との連携を通して」『教育実践研究論文集』第11号 沖縄県教育弘済会 2004年3月31日 74-78頁

^{v3}5年の道徳の授業実践は、石垣市立八島小学校授業力向上研究会編「八島っ子の学びの足跡—豊かな学びから学力をなくむ」琉球大学教育学部発行 2012年に掲載。

^{v4}このとりくみは、「この島のものづくり『かなさうちな一むん』総集編」2012年発行沖縄タイムスに掲載されている。

^x本実践は、2013（平成25）年11月21日八重山毎日新聞で紹介された。また本実践は、2014年第13回九州地区健康教育研究大会にて実践発表されている。

^{x1}登野城小学校の実践紹介は、2018年度講義時の発言である。現役最後の年をどのような思いで過ごしたのかをリアルに表現するため、あえて現在形の表現のままとしている。

^{x2}山口剛史「教師として島に生きる—学びとケアをつなぐ」『教育』NO.881 教育科学研究会 2019年6月1日 40頁

^{x3}廣田健「直面する困難を子どもとともに悩み、学ぶへき地教育の可能性」『教育』NO.881 教育科学研究会 2019年6月1日 49頁